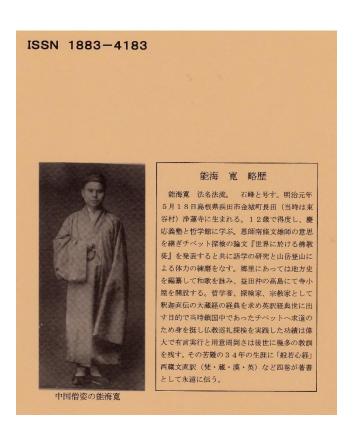
## 第八号 飛越関碑記 (明治 32年)

タイトル	飛越関碑記(明治 32 年)
著者名	能海寛
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 18 号
ページ	65 - 72
発行年	2013.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寬研究会)





## 「飛越関碑記」



能海 寛著

竊我恭寧城(化林坪)東二十里即日飛越関

也乃西鑪衛蔵之要道省城各属之衡衢引茶官

商来往絡鐸此山高嶺寒四時窮陰冷凍異常滯



七時寒気口身)

立鑪廰東界

(明治三十二年五月九日越嶺朝

跡疎稀自昔改協為営也

(下略)

光緒廿三年

A子桃夫三百有余に過ふ、又銅鉱の馬、石炭等多し、路上大に人多きに困る。石道に敷く又鍋のめいさん。東南行。又茶も多く送る人夫を辺よりは米食少く黄色の包子(唐モロコンの粉を子り丸くし焼きたるものか)を多く食す。

```
峨眉県草鞋市街謙益店、遊氏及彭と分袖。四門あり。城内一清里半里。四方城内外三千戸。
一日 十時半出北門、(東北行)
                      平地田八、九部、西え山脈あり。
                      石楠
   十一群半 休中分 一屆平型
                      奉浴碕、水少し。
                      桂記舗 (コイチープー) 二戸。
   一時 休井分茶
                      双福場五百戸。中央河あり。
                      平成橋開なり。東百里平野。
                      周氏京祠 (石橋)
(光行) 二時半午十分
                迴定
                      劉徳五十戸。雅河渡しあり。夾江二十里。雅河急、渡らず。河の西岸に訪ふて上る。養蚕盗、
                      レコイぞく、ムロムキの薬。
       大道二十里
       ◎★江□株があるというひ
                      河辺茶店 分流合小。一戸。
    五時木井分茶菓
                      四興桟河辺にあり四、五戸。船税関所紅旗あげり。二、三ケ所。古室。
行六十五里) 六時半着。八十五度
                      過河水少
1m
   六時発
                      木城、宏義官店泊。城あり。但し一方のみ内外玉、六百戸。河辺。夜刹頭。御書人二人談
                      話に来る。
    七時廿分
                 呵声
                      塔の下に小河を渡る。
    人時閉販
                      沙毛市(サーマコスー)百五十戸。八、九才の子四番を通読す。情字庫あり。塔也。
    九侍四十分
              共生
                      聽深聽汩匠。
            十二時十分休四十分
                      柑子場、二百戸、河の西岸を上る。平地薬蚕の桑異なるを見る。薬小なり。柳の如き様の
                      もら。
    一些主尔
                      壁雉存額也。
    二時十分休四十分
                      止才鎮、五百戸。何辺口江。何を渡る。西岸過河。
    四時十分水車田引水簡而便利
                      迎鳳場、五戸鑵あり。全面山を見る。
   高さ三間。本日阿片を多く見る
                      小駅二、三戸。本日二度老范を打つ。
    田植えは籾を蒔きたる間を間引
                     = 100
   へのな。
                      羅壩(ローパー)西岸、三百戸、萬口붢悪口。老范の言うを聞き予を見に来て礼をなしヲミ
                      トーフ、等云うも
北西行) 百五十里(八十五里)
                      四、五人あり。
五十里(八十五里) 六時三十分。八十五度
11 0
    六時発
                      遍定。
    七時廿分朝飯休卅分
                      九鎮餔、東岸三十戸。
    人時廿分米
                      竹箸関、二戸、関所あり。
    九時三十分
                      観音場、五十戸。小河大河に合す。鳥あり。寺あり。
    十二時休茶を飲み餅を食す
                      草坦場、四百戸、東岸。
    天気よく熱くして日中難走
                      週河、船頭を叱して早く過河せしむ。尚一時間を費やす。
    三時廿分休茶
                      木駅郷、西岸、二百戸。泰山石□当の石碑多し。
                      過河小河、雅州地にあり。
|百廿里(七十里)外人二名城内馬調教師
                      福安橋にて厳格寺牛の為に行李を改められ謂く。
「アラレ降り叉強雨
   五時半入る宿を探す
                      雅州府、東門、三月廿四日、年一度のトラドーホイの祭りにて遠近来会者多し城三里四方
四日 七時出南門
                      内外玉、六千戸。北二百廿里(七十里)外人二名
                                                   街、建幅店泊。
                      城内馬謂教師夜アラレ降り叉強風
    九時十分、寒し。
                      対崖(トイガイ)五十戸。銅礦、山崩れ険やん。
    寄稿大いに異なる。惘の花茄子
                      少駅沢山。
    の花もり。
                      紫石里、百廿小。
    十一些十分
                      日舗石 (パープーネ) 大千戸。
    氾人足を雇う。負荷し、田広し
                      小駅沢山。
28
   一時休三十分
                      観音舗、二、三百戸。山間の市街なり。
                      心理画
日而以上 二時三十分
               千尺
                      山頂、茶屋四、五戸。飛龍山。
へに匮う
           コ上まで
                      皆存衙
       皇あり
                      高橋四、五戸。突径県塩卡あり。
       通行人多し
4炭、銅、杓子、白鱗虫子、七十里
中山分首
                      て家橋、河辺、八十戸、宿よし。川北に流れ東北行。
天恩站宿。
五日 五時五十分
                      小駅あり
                      举而止旧。
```

```
小駅にて朝飯す
      九時廿分、何の南岸に上る
                        栄経県、四、五千戸、城壁ひく、山間の一平地、河あり舟なし。
      十些中分
                        鹿鳴里(領項帝故里)百五十戸、アヘン、ムギ、菜種、富豆、豌豆等多し。
      十二時 休
                        小駅
      一掛十五分
                        金家湾(チンクーザン)五十戸。
                        大通橋廿戸、石橋を渡る此川下にて川支流と合す。
      二性主尔
                        棲止堡、百戸、此地ミカンあり、色紅く形コズに似る。寒き地のミカンこれなるか。
      四時過ぎより降雨、雪山あり
                        田地あり
      四時三十分降雨、治す。
                        黄泥舗、百五十戸、山間の一駅なり、山禺発店、六時食、子る七時。以上田畠なし。
五月六日
      六時 五十五度
                        櫛を売る小駅あり
                        小駅
      七時卅分
                        小関格余戸、茅葺き、宿あるも特に悪し。
                        二、三戸の小駅、坂急に上る、橋を渡る。
      九時卅分
                        大関十戸斗り、板屋根、坂上の一駅。
      十些丰分
                        小駅、板葺きの粗屋なり。
                長東
                        小职
      十二時世分
                        陳雲庵、四、五戸
             大象領
        六千五百尺、六千尺
                        三大湾一戸
          以上の地をこす
                        草鞋坪頂上には家なく、少しく越して三、四戸あり。
      11性
                        廿四盤、七、八戸
      遠景山嶺重星高
                        半圈門、二十戸、
      深人跡なきの地なるが如し
                        清渓県、は古黎州(チンチーシェン)、城内外寂として繁昌せず、人家七、八百戸。地形顔
      四時三十分、風強
                        る奇沙流の地なり、斜
                        地なり。徳性店、此辺田なし、アヘン畠なし、麦畠なり。
五月七日
      五時四十分
                        冷飯口、二戸
      七時三十分、朝飯、休卅分
河の両岸剣
                        冨奥場(フーシンチャン)、田、阿片畠あり、百五十戸、北岸に沿って上る
山にして草
                        同、合点、右河に沿って上る、即北岸なり。
まれに生し 十時十分 休廿分
焼土にして
                         麗術麗、一帯、対패十戸。
石崩れ流砂 十二時三十分
                         小駅、三戸。
甚しく荒地
                         何合点、右岸に沿って上る北岸行なり。
なり尓れど 二時三十分
                         電線に合す、清渓の近辺羊圏よりの小分路ここに来り山を下りて本道に合す。
も地悪しき
                         小駅、十戸、桃、リンゴ、ビワ、梅、カキ、冨豆、阿片、麦、茶、唐モロコシなど。
ゆえに僅少 四時四十分、
地もより耕し人民住す、人家まれにして
異城異風蛮界 の入口たるの如し
二百六十里 (七十里)
                        泥頭、三百戸、黎洲西塞、四陸桜及塔あり。田、阿片、畠あり、河岸の上にあり。、
五月八日 九時発、名楊官店
      十一時、朝飯
                        大湾頭、三戸、豆腐六厘。
                         高橋、石造五丈。
      十11世
                         観音閣、近辺二、三十戸。
      十二時四十分
                        鶴米橋 (三交口) 廿戸。
      1 #
                        林口、王戸。
      11#
                         小駅、三戸、店あり、
石臼、水車
                         小駅、 五戸
各種的を険
くたニュア
      五時、三百十里 (五十里)
                        伏龍寺(龍盛店、三、四戸、老范ガタガタ振るい三十八度、風邪、手にもつ火円を画く、
      大時
压用九日
                         此近辺大雪降る)
                         飛越嶺関所、一戸、但し人住せず、石碑あり。
      中带
           大千尺
                         松林口 (サンリンカア) 三戸。
      七苹牛
            飛越領
                         瓦菜坪 (ワーヨーピン)、四戸。
      八時 朝飯食う
                         化林坪、二百戸、兵住し、繁化ならず。
      九時十五分
                         赵长深、十厂。
                         馬松坡 (マーソンポー)、五戸。
      十十世升
                         小駅
```

政百通り跋が限が押し。

十二時 阿片、ビワ、梅、炙、一〇 驢馬舗(ローマーポー)、百五十戸。 害モロコシ 新鎮〇 川田 冷礡、百五十戸、田畠広し、但し阿片多し。 口性头 **小駅、一厂。 小駅、三戸。** 五時 着す、米販を得ざる 甘露寺、勝景山林あり、寺立派、僧住す。 今日共、二日間 瓦九、拾戸、桟房にあらず、房圏、予一人子だいあり通泳人の安宿なり。 三百八十五里 (七十五里) 小駅 大巴 (ターパー) 十戸。 五月十日 大時二十分第 七時廿分 朝飯、休四十分 小駅 小駅、玲瓏より濾定に四十五里、二千尺を上る。 此辺砂金多し 十時二十分 幸に無事過橋西岸 濾定橋、東岸三百、橋長三十一丈一尺、修復中、高五丈、巾九尺、危険、化身手を携へ て渡り忽ち去る。 に床題食す 十一年半 朱四十分吃茶 小駅、 新家 一時三十分 休吃豆腐 茶里(サーリー)、地蹟く田畠あり、阿片を造る、二地所、七、八十戸。 三戸、家屋の風大に異なり、石を畳み蔵の形とす、やや上地対岸。又土蔵形石屋十四、 **五戸(法輪常転、ラマ寺あり、住せず。)** 三世半 北江 四些羊尔 サーワー、川に像あり、ラマ信徒の家康を揚げる。 五時廿分 大ペンパー、福興居あり、三十戸。 11' 1111 七、八戸 日暮れ夜道老范谷困る、洋傘を 谷川に架橋あり、谷山白雪。 忘れ二里取りに帰る 人時三十分 最大難行 四百七十里(八十五里)或は九十里 或は百里 五月十一日 八時初 瓦寺溝、大度江に瀘河の合する地にして百余戸、鵞定より祠寺に六十里、三千尺を上る。 龍あり、行台あり、近辺廿余戸。 九時四十分 頭道水、四川阜知協標左営頭道水塘。 十世半 日定、十四戸 西南に屈る。瓦寺溝より炉に至る、六十里。或は六十五、或は七十里。道甚だ悪しく上 川中四十分 ること五千尺。 大學三十分 五百十五里 (四十五里) 或は五十里 五月十二日 八時廿分 打箭罐、千余戸、此近辺の山幾分か晴れたる地にして四面山、白雪を頂く蔵人多し。 十样三十分 宿着 五百三十里 (十五里) **人**大道至西蔵 大道、川 小酒 重慶至成都一千二十里、成都至嘉定三百九十里、嘉定至峨眉八十里、峨眉至雅州二百二十里、雅州至打箭鑓五百三十里、合計二千二百四 十里。格外到新都県(往復)八十里、峨眉登山上下二百四十里、計三百二十里。以上大合計二千五百六十里。 五月十二日 午前十時半着炉。油海椒(トハイチャラ)、酷菜、酷葱、塩、皮饅頭、焼きパン、オモユ汁、を食す。午後、市中散歩。佐藤、 小豆を求む。一合三十文、半斤七十文。ラマ寺を見る。薩迦寺に至り番僧及老婆と語す。寺の入口に犬のおるには閉口。品輿合信局に行く。 銀は正に達徳宿に着しおるという。夜風邪を犯して書信をしたたむ。五、六本。夜夢見、実に難所を経行き困難の夢うつつ、よく寝入られ ず。寒くして戸を閉つ。本日、散歩採金(砂金)の方法を見る。砂金を両口板に入れふりとる。 五月十三日 朝、老范帰慶。西炉老陝街途徳店宿。書面 重慶領事館(館員武田)途中井戸川氏 同水野宛昨夜認む(風邪を犯して)南條氏、本山上申、水野、国兄(国元、静) 降雨、終日、寝床に引き籠り風邪を治す。吃菜、木炭を求む。三十斤、三百六十文。卵二ケ、十五文。 五月十四日 明日精進を命す。朝瓘く起き、宝内大掃除をなす。ゴミ多く実に大閉口なり。午後、炉より裏塘に至る道程、里数、地名等を 合照記出す。又掌櫃に西蔵教師を雇うことを相談す。別紙の談話をなす。降雨、寒く、五十度、笋に火を起こし寒を烫ぐ。午後、降雨、雷鳴。 慶至炉費 四月諸實。四五兩○九八、五月十二日迄。一七両三一五、六二両四一三、 五月十五日 御命日、勤行精進す。蔵語等を調らず。会計を正す。午後、降雨、夜茶をなし伏す。

**—** 68 **—** 

五月十六日 朝、ガラスにて左手親指を怪我す。動行、小降雨、山上雪なり。十二時発、川の右に沿って上る。湯の湧き出るを見る。只馬 に洗うにすぎず。勿体なき汝第なり。牛を見る角三屈し毛羊の如し。黄教(ラムツ)ラマ寺に行く。犬の為に入らず。更に大ラマ寺(大

五月廿三日 朝、五十四度、スー油、三両三十六文(一両十二文)、二斤(一個洋銭)(一斤十六両)サンパ麺半汁(二十文)を求む。午後、陝西人 李氏来談。日本仏教事情を話す。邪書の生意なりしと云う。外出す。城隍廟僧ラマ寺に「不能引我」と談し、予は砂糖一斤を送る。我実に無 情。心中念仏心をなだむ。彼信を失す。只彼の理由は予同じ。ラマ寺に共に行くも蛮語を話す不能云候にあるも実に外国僧を案内するをはば かるにあり。仕方なければ分れ出て、街上蔵の「リン」手鐘を求め帰る。本日掌櫃二錠銀子を持来たり、正に受取り済。一錠銀子を洋銭(予 の音眼鏡と問違へらる)廿四個及び切り半個洋銭五個。合計凡そ二十六個半と九両四銭と替ゆ。或店には「九両二銭」に四個洋銭減とられ、 予は他の店にて丸、四銭に三個。洋銭減にて壊ゆ二ケ半分、三ケ洋銭(十錠に付引く)の相場なり。本日晴好天(日中七十度)岸教寺(ラマ 寺)僧ラマ僧二人と少しく、城陰門前にて談話す。陝西府同官領人。蔵より二、三日前帰りたる人来談。雪一丈もあり正月蔵出立、三ケ月に

銀子)に付き二魂半、或は三魂洋銭を引き壊ゆ本日一ケを得。(チャイツ、牛ライツ、サンパミユン、酥油[アス、マル]夜、ボーイ来て

ロシキ(二円)、等を求め帰る。掌機姓解と談話し銀二百両の内百八十両を受取り二錠銀子 を彼みだりに使用す。不届千万の漢なり。好天。歓待。○洋銭(印度ルーピー)三銭二分。価三銭五分銀子。三百五、六十文。十両(一錠

蔵にも尚洋館舗蔵舗の両様を用ゆ。騎性口、蔵より祭木多迄+両。祭木より炉に至る十両。合計廿乃玉廿五両を要すにて候。衣服は皮衣一 件。尚寒むく上に尚外套を被るを要すに候。十二時出て西門外(西門なし西方の山)川に沿うて上る。温泉を見る。大路あり。西蔵に至る小 路にして明正に至ると云うこと大山を越す道。茶(六包)を荷へる牛馬七十二頭、七人の使牲口者過山するを見る。夫より山を斜に炉城の背 後山頂に出て炉街を眼下に一看し下り城隍廟に行く。僧不在。観音閣に行き僧と談話す。功果月一斗米。街上西藏の印、キリ、小僧を打つフ

五月廿二日 朝、五十六度。朝掌櫃及び陝西人来る(予若し店子を口るならば此人を入れん云しむ。此陝西人、昨日前蔵より帰炉。出立巳来三 ケ月。在蔵三年茶を慣う。路上十五人以上同行者を要す。賊あり、首級をはね荷物を奪う。

高压日草 0 上疳起点 0 imim i 1000K 重裏 四〇〇〇尺 五五〇〇尺 まま 嘉定 五000尺 俄冒県 五壱〇〇尺 俄冒山 1H100R 雅州尺 KOOOK 観告誦山頂 七五〇〇尺 关连具 六五〇〇尺 大象領草鞋坪 二三〇〇〇尺 肯实具 1年00尺 1年000尺 富具生 **医玻璃** 一七五〇〇尺 令演 111000K 瓦字葉 1 E1000K **广**經 14000 老爺小便壺(シビン)を雨に洗い自ら室に持ち入るあり。

五月廿一日 朝、大浄洗をなし、板の間を拭く。朝五十度。十二時、強雨雷傳。剃頭す。(日光、富土、筑波等に登山は経験より左に)

価一銭)②三銭(三分一銅)③六銭(三分銅の三種なる由、七仏通戒傷和訳を一定し、翻訳す。紙袋を張る。晴天、夕方雨。)

説を対照)を作る。 五月二十日 朝、五十八度。午前、煮豆。城隍寺僧円照及び九老洞僧二人来訪、一時間斗り談話。明日行くことを約す。二葉櫃来談。大に蔵 語教師を雇う事に付き談話す。打箭炉にて洋銭(三銭二分)に墺へ。察木多に至り再び西蔵銭に替えること。西蔵銭は①Ⅰ銭五分(含同故に

打炉には清国人一人、英人三人、住まる由、外人三人、信者少し。炉に薬僧合計五人斗りなりたり。 五月十九日 晴天、風あり、六十二度。 掃を造る。 蔵字及び蔵語を自独習す。 気分大に好し。 午後、微雨。 三千年表を作る。 釈尊年代考(異

に一人歩行にては二個錠銀二十両にて達せらるる云しむ。

佛教の有様、一、ラマ僧教師を頼むこと。今、明日は釈尊降誕日にて暇なし。追って我宿に来り共にラマ寺に行くことを約す。 進蔵サンパミエン、米等を持参すること。洋銭(三銭二分)に替えること。西蔵及び炉に通用すること。炉より裏増まで馬五ケ洋銭。裏増よ り巴増まで八ケ洋銭。巴より蔡木まで六ケ半洋銭。蔡木より丁日(テインツー)まで十四天、此後は寺に宿して蔵に行かるる。故に鞍に至る

五月十八日(北門外一里「サンクー」新カイスーの地方に至る。二十里斗り散歩。帰途僧に逢い誘われて彼の寺に行く。即ち北門内、城隍廟に して名円照と称す。天全にして五台、北京、上海等に皆廻りたる僧なり。外に一僧あり、峨眉山、九老洞の僧なる由。談話、日清の国状及び

本日終日、強雨降り「進蔵路程照見」上下を作る。夜十二時迄夜学をなす。

上海 合計九百四十英里

神戸 五百六十四里

終點)

東京 三百七十六里

打箭炉 合計七千五百四十五里

成都 一千二十里

重慶 1十二十里

宜昌 一千八百六十里 (四百哩)

大〇〇尺 10005

一千二百七十五里 (三百九十三哩)

上海 二千三百七十里 (五百九十哩、日本二百七十四里)

五月十七日 強降雨、寒く椅子にてコタツを造りあたる。又進蔵控覚を記す。

改三 麻嘛呢鉾爾吽を念仏と同様称念のむけること。含む輪を用ゆること。

故に拈香法坊 昭覚寺の如き風にして親指と高指に印を結び拝礼す。

左手真諦門 一、弥陀 二、回向 三、口 四、諸天呂神、五、法類

摇 田田 长

店等あり。夕食甚だ佳味ハイチャヲを混す。(本日シラミ五匹、ズボン下におる。十数年来の不潔生物)

改第二 右手俗諦門 一、父子 二、朋友 三、君臣 四、夫婦 五、兄弟

政第一 支那人も西蔵人も皆、自国の文の経を読むに日本人は何故に日本語の経を読む事を得ざるか残念残念。帰朝早々日本文読経に改むる 1121°

数堂)に至る。叉犬の為に入らず。門前の小ラマ寺に入り、ラマ僧弌、七説教をなす。参詣大二、三十人。板の仏間に座して聽聞す。灯 明バター(牛酪なり)立派なり。御水を呑む。堂を百遍廻る。同行多し。歌を語う。話し通ぜず。要領を得ず。僧は座して読経出て来らず。 観音、経皇主等を祭る。下に沿って下る。路辺石に蔵文を刻むもの多し。降雨、市中を一見して帰る。天主堂牧善堂、西蔵人会堂、西洋

五月三十一日 朝入湯。一ケ支那人自ら利せんとて人里なきと称し、予を困む。予は彼が鼻をあかせんとて、九時、自ら出発、布団を荷い出発。 二十里を下りて一人を雇い(十時半)、十二時、両大路を経て、一時帰着炉す。今回の小旅行大に得る所あり。本日途中三、四十頭の茶運の

**尔、丹珠尓のデゲーと称する地(折多より北行。十五、六日里程、北行土司あり。チェクーに連す。)にて三百余部、全部一千両斗りにて買** る由。其他、蔵内尚売ありという。午後二時、出て上折多を巡回。道、二支に分かれ進蔵は上走の由。山を経て入湯。雨を犯して帰り。牧牛、 羊、豚、馬等の生活。蔵人の生活風を見る。夜強雨降る。

混す。風景好、山開き地廣し。夜ラマ閉等来話す。 五月三十日 好天。朝、入浴。帰宅同宿のラマ僧を訪い、談話。彼、仏像及経文を包みより出し拝せしむ。叉蔵語を教へ二時間斗り談話。干珠

河二流に分かる。 光行 進蔵 至雲南、(二十九日。上走、騎性口十二時発(途中一時間半休) 五時半折多着) (三十一日。下走。九時発、一時着炉、走路) 本日始めて蔵人の生活を見る。手にて粉をかく。酥油茶等。五時半、折多着。御飯後、入浴。人家より山を上る一里川辺に出つ。冷熱、雨水

大教堂、寺を過ぎて二里。道下、石房家、休む一時間半。一休谿馬。干珠尓、十軸あり。 両大路、道上下に分かる山辺、河辺二、三の石室及対岸、天幕の家を見る。 大興郷、一戸。河、折多河と玉麒宮川に分かる。対岸の山上大雪山。 西行 板橋 一、二戸散在 石桶 折多、所々十五、六家散在。予は下より二戸目に宿す。 1 ===

左走折多山至河口 右走玉獻宮、磨西麺 南行 ⑤ 打箭鑓、南門

五月廿九日 昨夜強雨。好天。朝六時起。途上井戸川、原田氏に面し東門外一里送り。両氏帰慶、天全を従て峨眉山、嘉定、舖州、鎌口を経六 月二十日、帰慶。八月十日頃、帰朝、出立なり由。石川氏へ宛書面を託す。好天。昨夜、西蔵経を字引にて謂べ一句を読む。今朝、蔵経一頁 を読了。十二時発、折多。入陽行。蔵人「ヨン」と同道。大教堂の上みより敗牲口、壱ケ洋銭。

洋店の番頭二人来る。談す。予九時帰宿。井氏へ托し石川舜台氏へ書面書く。 書面 上海別院。宮島先生、本山上申。第十一回(第五期の五)。国元浄蓮寺。以上郵法。原田氏へ托す。外に井戸川氏へ宅して川舜台氏へ 神庙。

五月廿八日 晴天。御命日勤行。昨夜、一時迄、本山上申書面を認む。本日、国元及び宮島、上海へ宛て書面を認む。午後四時、朱氏及び蔵人 「ヨンチェー」氏来談。御住職(ラマ経)「三部祈祷法章」を蔵僧より送らる。共に三人同道。井氏の宴席に臨む。予は精進す。又「コヒ子」

徳店に帰り、地理上等の談話をなし、四時より三名にて包席を食す。朱氏、本日忌日、不食故に不来。六時頃より共に井氏を訪う。途上ラマ 人に逢い共に井氏宅に行き西蔵の模様及びターデリンより前蔵の道並びに入蔵、出蔵の手続きを聞く。「ヤトン」の関所にては下来人を蔵 王殺すとの話には大に閉口。この鞍人同じく帰蔵六ケ敷由。叉朱氏来り共に談話。以上二人、蔵語を予に教えることを諸す。誠に便宜を得た り。九時帰宿。「ヤタン」は中国の僧は出ることを得べし云しむ。八年前、英蔵戦争。其前英人三年在蔵帰印。外人を嫌う甚だし。

五月廿七日 晴天。朝、朱氏不来。食後十一時、井氏を訪い有益。石川氏の進言、談話。二時間。一時より外出。上地より湧泉地を巡見。達

五月廿六日 朱先生不来。井戸川氏、原田氏、両君来訪。一時間余談話共に出て、北門観音閣を巡見。分れ雨を犯して帰る。明日の包席を頼む。 降強雨。夜月翠桜下に聞こゆ。旅僧限りなし。耳、鼻、防寒。雪にてすること。火及び湯最も悪し。足に汗出るを干布にて拭くを要す。金 王を皮にて包むこと。井氏より硯石を送らる。即皇后陛下下賜のものなり。

を学ぶ十五年なり。井氏八日から十日頃、帰朝のはずなり。成田氏、七月始、来炉のはずなる由。蒙古僧三十人進蔵せりという。狗をチン かいら。

喧嘩を見過河。南門裏塘に行く。この時井氏従僕劉を見当り。偶然にも井戸川大尉、原田氏、一昨着炉。予を探して見当たらず。尓るに予ふ と両氏に面するを得、喜び限りなく、この夜天主教徒周氏に逢。蔵語教師を頼み、其他快談する。包席を馳走せられ右四人快話。八時過ぎ雨 を犯して帰る。今日談話する所有益の言多し。周氏巴塘にあり。井氏予の為に大に尽し申せられ異郷実に喜び限りなし。在炉信者百余。天主 教会堂二ケ所。外人二人。信者少し。英耶蘇会堂一ケ所。外人二人。巴塘天主会堂あり。この地方小路を行けば二、三百の天主会教徒あり。 叉近方二、三千の教徒あり。皆蔵人なり。回々教徒在炉多く、寺叉あり。肉、茶、麺の商い皆回人なり。周氏はラマ寺の僧と懇意にして蔵語

五月廿五日 「西蔵図考」、「源流考」及「読審隘篇」を読む。午後、ふと洋銭を換へんと欲して、ふと心にまかせ道を南に転じ道中、漢蔵人の

第八回 同 四月廿二日。成都。(第五期の二、成都記事、四大寺、成都出発) 第九回 同 五月一日。峨眉県。(第五期の三、成都、峨眉間、峨眉山記事、単独眉出立) 五月十三日。 打箭鑓。 (第五期の四、峨眉、西炉間) 無十回 回

解七回 回 四月十四日。成都。(第五期の一、重慶、成都間、草堂寺)

第六回 同 三月三十日。重慶。(第四期の三、送金領収書、江上紀行、重慶出発、写真)

第五回 同 二月四日。重慶。(第四期の二、重慶記事、江北、華厳寺)

第四回 明治三十二年一月十三日。重慶。(第四期の一、宜昌、重慶問、送金高及手続き)

十二月四日。宜昌。(第三期、漢口、宜昌間、簡単) 第三回 回

十一月三十日。 漢口。 (第二期、上海、漢口間及漢口、宜昌、漢邸記事) 無11回 回

第一回 明治三十一年十一月十八日。上海。(第一期、京都、上海間渡信記事)

五月廿四日 「西蔵図考」巻一及び第二「源流考」一半を読み、叉習字並びに波利字、阿旨王代字、口曇字を写す。本日は旧十五日にて一日二 度、動行となれり。店主より麺、菜を馳走す。パター甚だよし。毎日洋食の如し。日中六十二度、風夕方微雨。暫く午睡す。夕食大馳走なり。 本山上申書発送表

て到着。途上食物有りしと云。夕方、雷口降雨。雪中馬やはり通す。蛮狗、子に噛みつかんと吼ゆ。 打箭炉東経九十八度、北緯三十度、海面を抜く凡そ一万九千尺(日算、五月廿一日、日記の下に表を作る)



六月二十九日 本朝、名刺を軍糧府官にて通す。叉寺本君同様。夜、朱氏来。昨日、軍糧府行に付いろいろの事を談し、依頼す。七十四度。 六月三十日 朝、寺本君宿所を探り回る。数戸。後、市中に履を求む。午後五時、軍糧府館へ行き劉氏に面し、第一に入蔵(巴口拒絶)。第二、 宇拉を一人二頭を得ること(□)。第三、蔵大臣への□所(不明)。第四、祭木多官員劉氏に面談の件(明日返事)第五、ラマ面談紹介の事

六月二十八日 勤行。夜、談話。十二時寝る。七十五度。歎し。本日軍糧府官への書面認め。寺本君と意見合せず。予は糧台へ日本人を告げざ MOTO °

大月二十七日 りん楽山上ラマ寺に行く。午後、四時、寺本君朱潜談話。羅氏等来る。七十二度。晴天。夜一時頃迄談話。

六月二十六日 晴天。北門外散歩。靴未だ宋らず。看玩、秤を求む。湯にて洗うこと。

六月二十五日 最天。看玩。

六月二十四日 強雨。五十度。高山上降雪。

香をたき、ろを然し、鐘を叩き祈祷す。奇々快々。遠近、又鐘の音聞く。後にて聞けば是月蝕を礼拝するなり。

書面 重慶領事館(成田、武田、浄蓮寺)夜、語学、皮靴出来来るも小なるゆへ受け取らず。 六月二十三日 本日は終日強雨。寒くして六十度なり。西蔵城及水口の地理。昨日製図。乞食。ラフエー チャニャ ハッパッパー、ラタ エーペパッー、パッパッパー、テッパッパー。今日は中国のそも何日なるや。夜、九時過、四方バク竹、大砲発砲、叉店子内客人桜の上下。

六月二十二日 降雨。(旧十五日)、本朝、領事館へ宛書面出す。品奥合便。

つ所なり。朱氏来らず。

り。種々薩多なり。夕方、重慶、成田氏の手紙着す。当分来られず。寺本氏出発せるとのことなり。 大月廿一日 刺麻経を読み始む。成田及武田二氏宛並に国元宛の三書を認め、重慶へ送る。□□□本日不在特帰る。皮靴を求め、明日出来る はずなり。城隍廟に看嬉。昨日よりもよし。老婦人、子供を連れ縄にかかり后夫に逢い王前にて許さるる所、及一人の強者能く、数人に勝

六月二十日 午前、食前「ヨン」氏来。西蔵文字につき語学及経曲を学ぶ。始めて意を得たり。食後、散歩。明正土司前にて 土官数百(子供騎馬百斗り)の行列を見、役所の中を見る。中国より同様直派なり。只、群集皆土人なり。それより武聖宮に行く。軍糧府口 総督府□皆知唱□。予も午後四時迄見て雨を犯して帰る。芝居は狂言。芝居、舞の混合同様なり。古代の事。願主婦人あり。王あり。蛮人あ

大月十九日 朝、降雨。左の打籠をなす。Narita Jopanese Consulate Chuny chings. 「Officials depart July 15. (Tachinlu) 一字二十仙にて八字、百六十仙(一両二銭)。三個ルーピー四分の三。右重慶迄なり。漢字は少しく。安価なり。叉上海へは一字二十八 仙なりと云う。電報局内、上海は四人なり。午後、暫く武霊宮に芝居を見る。「ヨン」を口口。夜、語学。本日、「江卡、乍丁地誌」を書く。

六月十八日 会館を設立し同郷人の知識、娯楽、道法に供す。新儒佛三道合併。其他会所。今朝、ラマ進蔵の大ラマ死去の大葬を見る。僧 二百余。亡主は二人に引かれて藁沓を限きしめて、続いて行く。音楽あわれなり。騎馬あり。叉蔵人の報員服美なり。叉天蓋、幢パン、 棺を黄なる紐にて皆引き手にして行く。小僧叉ドラ、ホラ、黄なる如くの帽を被る。巴塘、中旬、維西の地誌を書く。夜、語学。

数十人。日本の芝居及狂言の如き看あり。

六月十六日 「頭蔵地図」を製す。朱氏来らず。天熱し。七十二度。本日より「梵文阿弥陀経」(闍誦)を始む。 六月十七日 「打箭炉」及「裏塘地誌」を編す。夜、朱氏来。蔡木多官、本日着。劉氏、天七十二度。陝西会館に芝居を見る。面を被るあり。

蔵の音楽を遥かに開く。日本の飴売りの音曲に似たり。叉ホラを吹く。回教、真清寺の門口に入る。南礼門内の宅来る異躰西蔵経を見る。 六月十五日 御命日勤行。朝、蔵僧の行列蔵人の葬式を見る。ドラ(太鼓)鏡躰、ラッパ(蔵笛)、口口天蓋、等賑なり。釈迦文佛過去七佛舎 利宝塔(木造、十層閣)を安置し奉る。本日、七十二度、温かなり。

45° 六月十四日 朱氏と共に出て、南門内に香及酥油を求めて帰る。終日、蔵史を謂べ漸く四十四代に至り一段落を告ぐ。夜、雨。朱氏不来。夜、

時より午前二時迄、「西蔵史」を調べ漸く初帝王の記を終る。 大月十三日 終日、蔵史を調べ漸く三十二代スロンザンガンボー迄編輯す。諸書照覧する。昨日、蒙古僧五、六米炉入蔵の由。朱氏来りての話

大月十一日 「西蔵経文」を終日調べ漸く三、四行に過ぎず。強雨。本日より「三警傷和訓」誦す。 大月十二日 本日は五月五日の旧節句にてヨモギの葉を入口に筋り、叉二度吃酒、衣服を潜替えり。朝、馳走あり。闘子始めボーイ四人へ国百 文を与う。これ練例なりと云う。午後、東門外を散歩。網渡りを見、市中賑やか。洋人文那服着二人を見る。昨日の雨にて大水なり。夜、十

大月十日 行李ととのへ、炭を求む。□□□倒す。夜、語学。星、蔵人「ヨン」君来る。昨日帰炉の由。牛甘洋銭。語学を敷えることを得ず。 雨あり。

六月九日 「清国全地図」の大略図を製す。終日かかる。昨夜、拉薩近方図を製す。雨あり。

六月八日 初一五日に付、唐子より馳走。午後、北門外七、八里、二道橋辺迄散歩。途上、銀礦わき分所近郷炭高く休む。磺泉、硫黄の出る あり。夜、語学朱氏来る。

王会にて、バク竹、火砲盛なり。 六月七日 好天。日中六十度。冷し。図考七卷を読む。夜、会話を学ぶ。

石」青石を求め帰る。夜、蔵語、朱氏来り、物産語類。夜雷雨風。 六月六日 朝、五十度。夜、物産語、蔵韶学にて図考の名刺終る。夜、強雨。店子内病人を見る。薬郷の念起こる。旧四月廿八日は中国の菜

降雨。日曜に付、朱氏不来。曇天。 六月五日 観経を読む「以酥蜜和麨」の実際を覚る。午後、散歩。「黄ヤーモー」(蔵語センチー)五台山来的珠数二連半及陝西「リエアル

六月四日 冷五十七度。西蔵学老客法を考へたるの外、炉、察問小道。入蔵三大路。西蔵雑事、天事、地利類篇を読む。夜早くより休む。雷鳴、六月四日

より風雷。晚降雨。 大月三日 日中六十二度。蔵仏教宗派を謂ぶ。夜、語学人事類。雷傳少雨下る。

達頼、班禅の世代を謂べ編輯す。 六月二日 達頼九代及開祖。班禅の七代の傅を編ある。日中七十四度。紅教の沿革を謂べ編輯す。夜蔵語、地理部及代名詞を学ぶ。晴天。夕方

六月一日 好天。日中七十度。温暖なり。本日、四川近辺地図を査看するの外は、屑々。天主信者朱君は遂に来らず。僧を嫌うか。主人に制せ られたるかは内一つなり。十個洋銭を宿二掌板に拂う。夜八時頃、朱氏来り。蔵語を学ぶ。一時間余。数及天文語類。夜二時まで夜学をなし、

〇 蔵駐蔵大臣、正月、初三日頃当地発、帰国 〇 当駐滅大臣正月十日は当地発進蔵三、四百名。実は商人多し

牛馬を見る。好天。

- ⑤ 内三十五両 在炉實。

① 内弐百両 打箭炉 為替。 ② 内百廿両 重慶預ケ。

メ阳中恒。

◎ 内五十二両 路費、重慶及炉間。

②内拾一面 五、六月中拂、道中實、重啜銀。

○⑤ 内廿二而 在戶進藏準備。

⑤ 内百両 自帯来(五十両大銀塊五ケ。五十両小塊)。

自带泳費宛、四十五両(大塊 二個(各九両)、中塊一個四両、洋銭七十個(廿一両)、) 以上計 銀壱百九拾弐両也。 ○泳費四五両 七月三十一日 重慶より送り来る受取。 無1100

皮大箱子 九十三両(大塊 五個(各々九両五銭)、大塊 四塊(各々九両)、洋銭廿五個)。 竹大箱子 五十四両(大塊 六個 各々九両)

日記帳凡四冊。第四号(語学)、外に一冊。第七号(慶、炉日記)、三十一年日記。

(明日返事)。右の用を済し、二時間斗りにして帰宅。降雨有較子。寺本君同道。朱氏名刺を掲げて通ぜり。

海口蔵大臣に添書をも得ば好都合と思いしも万事不得。実に想想外なり。

意なり。「ヨンチョン」、日曜日に付き不来。夜八時頃宴終る。

文祭台官の顔を見、文蒙古僧に道に逢い同道致さん事を話す。

城内を巡回、準備、買物す。毛布等を求む。羊皮、経典を求む。

袴下、毛皮、紙等を求め、午後、箱子を包み、夜全く準備整う。

麻布包、重慶領事館宛七月七日、朱氏へ頼み送り出す。本国送付。

蔵佛泥、八般。観音七般。釈尊一斑。

珠数、藏珠一連。五台山珠一連。

一、十錠内一錠は廿五ケ洋銭、一包。在蔵費、九二。

一、大縫、一包。帰湫實、五五。

七月四日

五十、五十、四なり。

氏帰朝特帰り。

1'

1. 1.

1.

1'

1'

無一中

七月八日 打箭炉出発、進蔵。

打箭炉出立の節帯来

藏文 程 中 六 部、 小 甲。 藏寺用風鈴一握、金製。

**鲜强子、昆木数**个。

七月一日 軍糧府より使者李来り、刺麻寺への紹介はラマ大僧不在。又祭台劉明府は遠来の佛友に面せざる旨を通ぜり。寺本君は各地支那官吏 の保護に由りて行かんとし、叉予は支那僧風にて入らんとし、夜は大に議論合せず。予は炉軍糧に面するの意なし。只寺君に誘はし若しも文

七月二日 上海来の洋鈕子、大九十六個(二、〇)、小七十二個(一、)、赤、黄、青、黒、白、木綿糸壱斤半(一、半)、紐(一、)、針大八百(一、)、 中八百(一、)、小五百(半)、金口四個(半)、其他紐(半)、履下並に腕輪二ケ(一、)、蔵珠(半)、黄ガラス珠百ケ(一、)、右の蔵道中用 に求め、又日記帳十二冊(半)、を求め帰る。夕方、朱氏、蔵「ヨンチョン」、羅、寺本四人を招き一吊六、七百の馳走をなす。寺本着の祝

七月三日 寺本君同道、城隍廟辺に散歩。剣帽等を見る。午後、朱氏同道、皮蓋皮二個(六)、皮口袋二個(二百文)、両掛皮袋(一、)を求め、

一、入蔵書、八十個洋銭、二五、六。二錠銀子、一八、四。 小塊一錠、一九、五。六個半洋銭、及豫備、二、〇。中塊二個、九、五。

七月五日 朝、朱氏来り尽力。叉鞍子を求む。叉銀塊を換え買物をなす。夕方より夜へかけ国元、本山、南條、重慶への三通書信認む。五、二、

七月六日 朝、軍糧府へ明日出立の旨通知。役所より李氏及馬方来り。明後日送付の旨通知せらる依って、明後日に定む。二、三回城内を巡り

七月七日(役所より馬夫を紹介す。叉大刀子、□□□、大小一定、□巴、等を求め終日忙得很。朱氏へ左の書面を重慶へ送ることを依頼す。重 慶宛(一本、加藤、武田両氏宛。一本、本山上申、第十三回、第五期の六。一本、南條先生。一本国元、水野、静)。外に麻包一個、井戸川

打箭炉出立の節、在重慶預ケ金

一金壱百拾九両四銭三分也。

残 百両合八両四銭壱分 (残、百〇八両)、

内四十両 七月一日裏塘にて受取。 第一号、第二号、合計 三百両 炉架。

一金四百十両 重慶発、四月一日